

「神のことば」 2018年9月16日 奨励 工藤篤子

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。(ヨハネ1章1節)

皆さんは、家でどのように聖書を読んでいるでしょうか。毎日ほぼ決められた時間に読む人、たまにしか読まない人、みことばに飢え渴いて一日に何度も聖書を開いて読む人と、人によってさまざまだと思います。

私は、1984年に留学先のスペインで、アメリカ人宣教師を通して救いに導かれました。最初の数年は、朝起きた時、朝食の前に聖書を読み祈り、一日の終わりにまた読み、寝る前に、ルームメイトのマーシーと、その日みことばから学んだこと、気付かされたことを分かち合い、みことばを暗唱し合い、一緒に祈ってからそれぞれの寝室に戻って床につきました。今は、基本的に、聖書を読むのは午前中です。夜は、以前のようには頭が回らなくなりました。

1. 「砕かれた霊」をもって聖書を読む体験

私は1987年にスペインのマドリッドからドイツのハンブルクに移り、開拓伝道の働きを始めました。同時にスペインで歌手の道が開かれ、ドイツとスペインを行き来する生活が始まりました。そのような中で、1989年に、私は神の道を踏み外し、1990年1月に病になり、病床で深い悔い改めに導かれました。退院後、一年間、歌手としての活動をやめ、主との関係を建て直す時を持ちました。その期間、私はむさぼるように聖書を読みました。それは、私の心が悔恨で砕かれ、砕かれた心で聖書を読むごとに、ますます心が砕かれて行ったからです。心が砕かれれば砕かれるほど、砂地が水を吸うがごとく、みことばが私の心に浸透して行きました。あの時の体験は今も忘れることが出来ません。

悔い改めの詩篇51篇の17節で、ダビデが「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」と語ったように、主は、「砕かれた霊、悔いた心」を喜んで受け取ってくださり、親密な交わりに入れてくださることを、身をもって体験しました。

その後、みことばへの渴望に欠けるような時は、心が砕かれていないのは言うまでもなく、必ずと言っていいほど、傲慢になっている時、不平不満が心に満ちている時、思いが、神にではなく、生活・金銭・仕事・この世の楽しみ、人間関係の問題に向いているような時であることに気付かされるようになりました。ですから、自分の霊性を測るバロメーターは、どれだけの飢え渴きをもって聖書を読んでいるかになりました。そして、みことばへの飢え渴きに欠ける時は、詩篇139篇23, 24節に「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」とあるように、心に光を当ていただき、気付かされた罪を悔い改めるようにして来ました。そうやって主に悔いた心をさげるとき、主は必ず、みことばへの思いへと引き戻して来てくださいました。

2. ウォッチマン・ニーの「砕かれること」

ウォッチマン・ニー（1903-1972）という、中国の有名な伝道者がいます。彼は1922年、19歳の時に伝道者となり、1951年（48歳）に信仰のゆえに投獄され、21年後の1972年、獄中で亡くなりました。彼は非常に多くの書物を残しました。私は今、彼が書いた「霊の解放」という本を読んでいます。ウォッチマン・ニーは、「霊の解放とは、内なる人の霊が解放されることである、そのためには外なる人が砕かれなければならない。一粒の麦が地に落ちて死に、多くの実を結ぶためには、麦の殻が破られなければならないように、ナルドの香油を注ぐために、石膏のつぼが砕かれなければならないように」と語っています。内なる人とは神の霊が住んでいる部分、外なる人とは私たちの自我であります。その自我である外なる人を、神は、ふたつの方法で砕く、と、ウォッチマン・ニーは説明しています。一つは、積み重ねによって砕く方法、もうひとつは、まず突然砕き、その後で徐々に砕くという方法です。私の場合は、後者の方法で砕かれました。突然砕かれ、その後、積み重ねの砕きが続きました。この「砕き」の時期は、2, 3年続いたと思います。痛みの時であり、同時に、みことばに語られ、赦しの神に感謝する至幸と深い喜びの時でもありました。

3. 聖書の読み方の変化

2000年に「工藤篤子音楽ミニストリーズ」、現在の「工藤篤子ワーシップ・ミニストリーズ」を設立してからは、年間半分のドイツ滞在期は、許される限り、聖書セミナーの録音を聞いて学ぶようになりました。主に仕えるには、きちんと神学を学ばなければならない、という思いが大きくなっていました。ちょっとした時間も惜しんで、3度の食事の時にも録音をかけて学びました。その学びは約10年に及び、やっと自分の中に、神のマスター・プランの枠組が組み立てられたと思えるようになりました。

そのような時に、スイスでの詩篇の学びに参加しました。そこで、学びを導いておられた方と個人的にお話しをした際、その方から「あなたのみことばに対する態度はおかしい」と言われたのです。そして、「森を知りたいければ、まず木を見よ」とおっしゃいました。その方は神学者でしたから、神学を学ぶことが良くない、と言われたのではありませんでした。ただ、私に、神に向かう最も基本的な姿勢、つまりみことばに対する敬意が欠けていることを指摘されたのです。「権威ある神のみことばを、そんなに駆け足で通り過ぎるような読み方をしてはいけない」とおっしゃったのです。その時、私は、この10年、聖書を体系的に理解したいという思いのために、何と神のみことばの一つ一つをなぞりにして来たかに気付かされ、愕然としました。同時に、2000年に「工藤篤子音楽ミニストリーズ」の設立にあたって、何人かの先生から、「その前に、まず神学校に行って準備してはどうですか」と勧められた際、聖書宣教会（当時の「聖書神学舎」）の設立者であり、新改訳聖書を編纂され、日本の福音神学の第一人者であった、別名「みことば先生」と呼ばれた舟喜順一先生が、「『福音』と『神学』は違います。工藤さんは福音を伝える働きを

するので、日々みことばから語られたことを、賛美コンサートの中でお分かちして行けばよいのではないのでしょうか」とおっしゃってくださったことを思い出しました。

2011年2月、私は、それまでの聖書の読み方を悔い改め、まずひとつの詩篇を選び、数か月間、この詩篇をじっくり読み込むことを始めました。砕かれた心で（日々の悔い改めをもって）、ひとつひとつのことばを、時に音読を交えて、ゆっくりと大切に読んで行くと、主が私の霊に深くお語りくださるのを体験するようになりました。1990年に砕かれた心でみことばを読んだ時に深く心に沁み入った、あの至幸の時が再び訪れました。そして、あの時より、もう一段深いみことばの悟りを、聖霊が与えてくださるようになりました。

4. 「聞く聖書」の活用

同じような時に、ドイツの知人が、Bible.is というサイトを教えてくれました。Bible.is は世界各国・民族のことばで、聞く聖書と読む聖書を提供しているサイトです。日本語は、新共同訳の新約聖書ですが、この「聞く聖書」を、スマホやタブレットにダウンロードしました。以前は、3度の食事に聖書セミナーを聞いていたのですが、それからは、「聞く聖書」を聞くようになりました。

※礼拝後、ある方から、YouVersion という聖書アプリから、新約聖書だけでなく、旧約聖書も聞けることを教えていただきました。

5. みことばはいのち、薬

一日の3度の食事の時に「聞く聖書」を聞くようになったのは、もうひとつ理由があります。ある方が重い病にかかって医者から治らないと言われた時、箴言4章20～22節から、主のことばは全身の薬である、と書かれているのに気付いた時のことを聞いたからです。

4:20 わが子よ。私のことばをよく聞け。私の言うことに耳を傾けよ。

4:21 それをあなたの目から離さず、あなたの心のうちに保て。

4:22 見いだす者には、それはいのちとなり、その全身を健やかにする。



その全身の薬となる。(ヘブライ語原典)

普通、薬は一日3回食後に飲みます。その方は、主のみことばがいのちであり、薬であるなら、と、食後に聖書を読むことを始めたそうです。一日3度のみことばの薬は少しずつ彼の病を癒し、ついに完全にいやされたそうです。

その話しを聞いた時、私にはリュウマチがありました。それで、彼のように、日に3度みことばの薬をいただくなら私もいやされるかもしれない、いや、神のことばが朽ちない種なら、きっと私をいやすことができる、と思ったのです。そうやって、一日3度「聞く聖書」を聞いて行くうちに、ある日、イザヤ書53章5節の「彼(イエス)の打ち傷によって、

私たちはいやされた。」というみことばから、6月の奨励でもお分かちさせていただいたように、十字架の完全なみわざを信じ、神にいやしを求める大胆な祈りに導かれました。そして、リュウマチからも、それまで時々理由もなく襲われていた、頭の上にかかる黒雲、つまり鬱からもいやされました。神のいやしとは、「いのち」である神のことばが与えてくださるものであることを、今、私は確信しています。

6. 神のことばはイエス

「聞く聖書」に話しを戻します。最初に聞いた「聞く聖書」は、ヨハネの福音書でした。

「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（新共同訳）

このヨハネ1章を聞き始めた瞬間、それまでに感じたことのない深い畏敬の念に包まれました。私たちの主であるイエス・キリストを知り、私たちが、神であるイエスの御前にひれ伏すには、もうこのことばだけで十分であると思ったのです。

皆さんが使用している新改訳で見てみたいと思います。

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

1:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

1:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。

1:6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。

1:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。

7節まで来ると、この「ことば」とは、イエス・キリストを指していることが分かります。

最初からあり、神とともにあり、神であった「ことば」は、2節でもう一度、念押しのように、「この方は、初めに神とともにおられた」と語っています。ことばは神であるが、父なる神ではない、そして、父なる神と共に初めからおられたもうひとりの神、つまり、子なる神、イエス・キリストであります。

3 節では、「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」と語っています。聖書の初めの書、創世記 1 章 1 節は、皆さん良くご存知だと思います。「初めに、神が天と地を創造した。」です。

ヘブライ語では、

ベレシート バラー エロヒーム エト ハーシャマイーム ベエト ハアレツ
初めに 創造した 神 (複数形) (目的語) 天 (複数形) と 地

ヘブライ語の「神」、「エロヒーム」は、単数形の神「エル」の複数形です。聖書の最初の一行から、神が複数形であること、しかし「創造した」という動詞が単数形であることから、この複数の神が一体となって、天と地を創造したことを理解することができると思います。私は、三位一体の神、つまり、父なる神・子なるキリスト・聖霊なる神が、ひとつとなって、天と地を創造されたと信じています。

では、この三位一体の神はどのように世界を創造されたのでしょうか。神の口から発せられたことばをもってです。

創世記 1 章 3 節にこう書かれています。

神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

ことばはイエス・キリストです。そして、父なる神の口がことばを発せられる時、必ず息が伴います。「息」はヘブライ語で「ルーアッハ」と言い、「霊」とも訳されています。ですから、天と地は、父なる神が発せられたことばであるキリストが、聖霊とともに創造されたことが分かります。そのことが良くわかるのが、詩篇 33 篇 6 節です。

主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。

ここで、イザヤ書 55 章 10 節 11 節を見てみたいと思います。

10 雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。

11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

イエスが神のことばであることを理解する時、これほど、「ことばの力」が宣言されている聖句はないのではないかと思います。神の口から出ることば、つまりイエス・キリストが、必ず神の望むことを成し遂げ、神の言い送ったことを成功させるのです。

詩篇 56 篇 4 節には、こうあります。

神にあって、私はみことばを、ほめたたえます。私は神に信頼し、何も恐れませんが、私に何をなしえましょう。

イエスが神のことばであるなら、イエスを賛美するのと同じように、みことばをほめたたえることにも導かれて行くのだと思います。ダビデは、神にあって、みことばをほめたたえた後に、「私は神に信頼し、何も恐れませんが、私に何をなしえましょう」と告白しました。この詩篇は、ダビデが、ガマでペリシテ人に捕らえられた時に詠われたものです。窮地の中でダビデが「何も恐れませんが」と言うことが出来たのは、ダビデが神のことばを信頼したからです。

ダビデがほめたたえた「ことば」とは、モーセ5書、つまりモーセが書いたと言われる聖書の最初の5巻、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記のことを指していると思われます。

詩篇の中で、みことばの詩篇と呼ばれる詩篇 119 篇に何度も出てくる「ことば」「みおしえ」「仰せ」「いましめ」「さとし」「おきて」「さばき」「道」は、モーセ五書に書かれたひとつひとつのことばを指しているからです。この詩篇の作者にとって神のことばがどれほど重要で、作者が神のことばを守り、従おうとしているかが分かります。そして、作者は、神のことばに従わない者を憎む、そのような者から離れる、とさえ言っています。それは、作者が、神のことばが「いのち」であり、後に来る「救い主」であることを知っていたからだだと思います。モーセ五書には、神はご自身のことばに従う者を祝福し、主は彼にとって盾となり、勝利の剣となり、神に従わない者にはその者を退け、追い払い、のろい、滅ぼす、と明確に書いてあります。ですから、ダビデは、そのみことばを信頼し、ほめたたえ、何も恐れない、と言うことが出来たのです。

7. トッカータとフーガニ短調

Tocatta and Fugue de-moll
Johann Sebastian Bach

神の慟哭 感情のほとばしりを表わすひとつの音型
十字架
減七の和音 (十字架)
三位一体*3
二位格のキリスト 二位格のキリスト

バッハの代表的なオルガン曲の作品に、「トッカータとフーガニ短調」があります。多分、皆さん、どこかで聞いたことのある曲だと思います。

最初に皆さんに楽譜を見ていただきたいと思います。

最初のトリル タラランという音は、神の慟哭を表現しています。その後の音型は、感情のほとばしりです。それが三回、

高いところから低いところに向かって繰り返されています。これは、三位一体の神が、罪にあえぐ人類を見て、慟哭し、地に下って来たことを表わしています。そして、次の減七の和音は十字架を表わしています。バッハは、十字架を表わすときに、減七の和音を使いました。減七の和音というのは、一オクターブより半音低い、不完全な、破壊的に聞こえる和音です。

それから、三位一体を表わす三連符が3回繰り返され、その後に、二位格の神であるキリストを表わす二連符があり、また三連符が3回繰り返され、二位格のキリストの二連符、そしてまた三連符が3回繰り返され、その音型が2回繰り返されます。

その後、三位一体の神が、三連符の音型を取って、急いで地に降りてきます。そして、最後の減七の和音で十字架が表現され、次のピカルディ和音(長調)で、神の救いのみわぎが完成したこ

とが表現されています。

ここで、皆さんに、楽譜を見ながら、一度、曲を聞いていただきたいと思います。

<https://www.dropbox.com/s/vwzke49yeiq7rhr/14%20-%20J.S.%E3%83%90%E3%83%83%E3%83%8F%20%20%E3%83%88%E3%83%83%E3%82%AB%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%81%A8%E3%83%95%E3%83%BC%E3%82%AC%E3%83%8B%E7%9F%AD%E8%AA%BFBWV565.mp3?dl=0>

今、皆さんに、この、天から下られ、十字架にかかって救いのみわぎを完成されたイエスキリストが、神のことばであることを、今一度考えていただきたいと思います。このお方が神のことばであることを知るなら、神のことばが書かれた聖書を、どれほど大切に、じっくりと読み、みことばに従い、みことばに生きて行かなければならないかと思うのです。

皆さんはイエスさまをどれぐらい愛しているのでしょうか。皆さんのイエスさまへの愛を量りたいと思うなら、皆さんがどれぐらい聖書を愛しているかで分かります。イエスさまは神のことばだからです。

ですから、神に喜ばれないこと、忌み嫌われるものから離れ、日々自分の罪を告白して、イエスさまが十字架で流された血潮によって洗いよめられ、義なる人、つまり、主の御前に立つにふさわしい者とされて、主の声（みことば）に聞いて行くなら、主は必ず、私たちの心に語り、悟りを与えてくださいます。

私が尊敬する、もうお亡くなりになったひとりの信仰の先輩は、IT企業の社長でしたが、一日数時間、聖書を読む方でした。その方の口から出る言葉の半分以上は聖書のみことばでした。彼は、いつもこう言うておられました。「あなたが神の御声を聞きたいと本気で願うなら、その方法はとても簡単です。あなたがテレビとインターネットに使う時間を、聖書を読む時間に当てればよいのです。そうすれば私のように忙しい人間でも、一日のかなりの時間を、聖書を読む時間に当てることができます。」

また中国の教会へ行ったとき、ある姉妹が、聖書をしっかり胸に抱えて、「これは私の宝です。私はひと時も聖書から離れたことはありません」と言っていました。その姉妹は、仕事をし、家庭をもっていた人でしたが、ちょっとでも時間が出来ると聖書を開いて読んでいました。

8. 勧め

1) 自分には信仰が欠けていると思われる方、信仰を求めておられる方へ

是非聖書を読んでください。神のことばは、信仰をはぐくんでくれます。

ローマ人への手紙 10 章 17 節にこう書かれています。

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

「キリストについてのみことば」、とは、キリストを証する聖書全体のことでありますが、信仰に入られたばかりの方、あるいは、まだ信仰には至っていないけれども、求めておられる方には、まず、キリストについて書かれ、キリストが語られたことばが書かれた、新約聖書の4つの福音書を読むことをお勧めします。その中でも、特に、最初にヨハネの福音書を読まれることを、私はお勧めしたいと思います。

2) 誘惑と戦っている方へ

聖書のことばを暗唱し、心に蓄えることをお勧めします。

詩篇 119 篇 11 節にこう書かれているからです。

あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。

3) すべての信仰者へ

みことばの暗唱は、誘惑と戦っている人だけでなく、すべての信仰者に私はお勧めします。私たちは、いつも霊的戦いの中に置かれているからです。今、自分の滅亡が近くなっていることを知っているサタンは、増々激しくキリスト者を、特に神に忠実に従おうとするキリスト者や教会を攻撃しているからです。

中国では、1966～1976年に文化大革命が起きました。多くのクリスチャンが迫害されました。牢獄に入れられたクリスチャンたちは、一日中共産主義思想を教えられ、信仰を捨てるように迫られました。その迫害に耐え、生き残ることができたのは、みことばを暗唱していた人たちだけだったと言われていています。残りのクリスチャンはみな、自殺を図ったり、気が狂ったり、仲間の信者を裏切ったりしました。これは、文化大革命の時のことだけでなく、今、再び中国で、また迫害下にある国々に襲いかかっている現実でもあります。私たちも、もし、神のことばを心に蓄えていないなら、苦難に遭遇した時、邪悪な日が来た時、主に従って生きることが難しくなるでしょう。ですから、私たちは、神のことばを読み、聞き、暗唱しながら、いのちであり、イエス・キリストである神のことばを、心にしっかり蓄え刻んで行こうではありませんか。

最後に、ヤコブの手紙 1 章 21 節のことばをもって、「神のことば」と題して語らせていただいた、私の奨励を締めくくらせていただきたいと思います。

「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」

この「たましいの救い」とは、私たちの日々の、そして一瞬一瞬の救いであり、「みことば」こそ、われらの救い主イエス・キリストであります。

お祈りします。